

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
共同プロジェクト研究  
2024年度研究【経過】成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名	
	文学部・准教授		四日市康博	
研究課題	エジプト・フスタート(古カイロ)遺跡出土陶磁資料の再整理と再分析			
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2025年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名	
	沖縄県立芸術大学・美術工芸学部・教授		森 達也	
	出光美術館・学芸課・学芸課長		徳留 大輔	
	立教大学大学院・文学研究科・博士後期課程		殷 慈環	
立教大学大学院・文学研究科・博士後期課程		庄 媽婷		
全研究期間	2024年度 ~ 2026年度			
研究経費※ (上段:支出金額)	2024年度	2025年度	2026年度	総計
	1,190,835	0,000,000	0,000,000	1,190,835
(下段:採択金額)	1,200,000	1,400,000	2,000,000	4,600,000

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。

エジプト・フスタート遺跡はオールド・カイロとも呼ばれ、13世紀まではエジプトの首都中心部として繁栄し、東は中国・東南アジア・インド・イラン、西は地中海・ヨーロッパ世界から人・モノ・文化が流入し、東西交流の中心地のひとつとなっていた。それは東西交流史のみならず陶磁器研究・考古学の立場からも世界的な注目を浴びることになり、エジプトと協力して日本の調査隊が度々関わり、特に早稲田大学と出光美術館の調査隊は大量の遺物を発掘した。しかし、その資料はこれまで諸事情により世間に公表されず塩漬けになったまま眠ってきた。近年、本学の四日市康博は、関係各位の承諾と協力を得て、早稲田大学考古学資料館に眠っていた陶磁資料調査・整理・公表する機会と権限を与えられた。本資料は中国を中心にアジア・イスラーム・地中海各地を包括する極めて重要な資料である。その全容が解明された暁には、歴史学・考古学・美術史・宗教学などに極めて大きな学術的寄与とインパクトを与えるであろう。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 陶磁の路(海のシルクロード) ] [ 東西ユーラシア交流 ] [ イスラーム社会 ]

**研究【経過】成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。  
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本庄早稲田の早稲田大学考古学資料館所蔵のフスタート出土遺物の中国陶磁片資料に関する悉皆調査をおこなうのが本共同研究の最も根幹となる部分であるが、昨年度は、2024年9月、11月、2025年1月の三度にわたって本庄早稲田で該当資料の再整理・撮影・分析をおこなった。この作業は従来、数年間にわたって継続している調査であり、昨年度までにかかなりの部分の再整理・撮影を終え、今年度(2025年度)あるいは来年度中には本庄早稲田所蔵分の資料の再整理・撮影が完了する予定である。再整理と分析の結果、1992年に刊行された『アル・フスタート遺跡報告書』の内容を大きく修正することができた。具体的には、陶磁の産地、器形、年代などについて、旧報告書刊行から30年以上にわたる研究の進捗の成果から新たに特定・分類をおこなった。特に白磁に関しては、福建産の閩江流域の閩清窯産製品や沿海地域の連江窯産製品、また、青磁に関しては、甫田の庄辺窯産製品など倣龍泉窯青磁器の特定、景德鎮産青磁器などを特定することによって従来の知見を修正することができた。龍泉窯青磁そのものについても新安沈没船から出土した基準資料を編年の基準として、過去の編年分類に対して修正をおこなうことができた。

2025年3月には、早稲田大学考古学資料館が所蔵しているフスタート出土中国陶磁資料のみならず、岡山県の倉敷市にある大原美術館において、当館所蔵のフスタート出土陶磁器資料の調査もおこなった。大原美術館においては、中国陶磁器のみならず、塔美術館が所蔵しているフスタート出土イスラーム陶器も実見し、特に倣中国陶磁器として制作された白釉・青釉・蓮弁紋付などのイスラーム陶磁を考察し、中国陶磁器との比較対照をおこなった。

同じく2025年3月には、沖縄県において当県出土の中国陶磁資料調査をフスタート遺跡出土資料との比較研究の観点からおこなった。まず、沖縄県立埋蔵文化財センターにおいては、主に那覇港遺に相当する渡地村跡出土の中国青磁資料と首里城正殿および御内原北区・南区から出土した中国青磁資料および中国青花瓷資料の調査をおこない、今帰仁村の今帰仁城歴史文化センターにおいては、今帰仁グスク・今帰仁グスク周辺遺跡からの出土陶磁片の調査をおこなった。また、沖縄県立博物館・美術館、首里城、読谷村ゆんたんざミュージアム、恩納村博物館においても展示されている陶磁器資料、或いは収蔵庫に保管されている陶磁器資料の調査をおこなった。

## 研究【経過】成果】の概要(つづき)

2025年1月には京都および岡山で資料調査をおこなったが、これは陶磁器調査に加えて、陶磁器の意匠を東西ユーラシアにおける装飾・意匠の伝播と相互影響の観点から見ることを目的としたものである。京都では、雨宝院、地藏院、頂法寺、三千院、来迎院、実光院、仏光寺、平等寺、清涼寺、二尊院などで瓔珞に関する調査をおこなった。メンバーの一人は宗教装飾の研究を専門としており、仏像や天蓋に見える瓔珞紋様の陶磁器に対する反映を考察した。それらは特に明清代の青花瓷器に見られるが、一部、宋・遼・金代の陶磁器装飾にも見ることができる。さらには、元代の青花瓷器の意匠にはなぜ瓔珞紋様が見られないのか、その背景には社会的な要因が存在するのかという点も重要な問題となる。それらの問題に解明には、エジプト・フスタートから出土している中国陶磁器やイスラーム陶器の意匠やその相互影響が格好の研究対象となる。現在のところ、早稲田大学考古学資料館所蔵のフスタート遺跡出土資料から瓔珞紋様のある青花瓷器は見つかっていないが、今後、明代の青花瓷器を本格的に調査してゆく過程で、瓔珞紋様が発見される可能性は少なくないと予想される。なお、岡山(倉敷)においては、この後3月におこなわれた大倉美術館所蔵フスタート遺跡出土資料調査に先駆けて、その予備調査がおこなわれ、さらには、岡山県立博物館、岡山オリエント博物館において中国陶磁器およびイスラーム陶器、イスラーム・タイルの調査をおこなった。

なお、立教大学では四日市および四日市ゼミ院生で毎月、ペルシア語史料・アラビア語史料講読をおこない、ペルシャ湾および紅海地域における中国陶磁器や中国製品の流通状況に関する検討がおこなわれた。エジプトに直結する紅海を中心港であるイエメンのアデン港におけるインド洋貿易の実態を記録した港湾関税品目を含むアラビア語の行政文書アーカイブ *Nur al-Ma'arif* (『知識の光』)があるが、当該史料を講読するための準備会をおこない、同時にペルシア語・アラビア語を習得していないメンバーの為にペルシア語・アラビア語の勉強会を開催した。年度の後半には、実際に史料講読を進め、内容に関する検討がおこなわれた。

以上の内容は、あくまでも研究経過であり、第二年度、三年度は上述の調査をさらに進捗させると同時に、それを成果として取りまとめ、さらには社会に発信していく予定である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 四日市康博「新発見のペルシャ湾港市遺跡～ネイバンド、ブトハーネ、アーバーダーン」『なじまあ Accessible Asia』15, 2025, pp.16-17.

④ 四日市康博「13 世紀末印度洋貿易結構中的陶磁器 --- 以波斯湾海上貿易路线与陆上商队路线为中心」海上丝绸之路考古研究研讨会. 景德镇, 2024. 11. 28

④ YOKKAICHI Yasuhiro. "The Mongol Empire and Trade in Horses across the Indian Ocean." International Conference: The Legacy of the Mongol Empire: Written Sources and Material Culture. Ulaanbaatar: Mongol National University, 2024.8.23

① 森達也、徳留大輔「輸出陶磁器の生産地と消費地の様相－近年の調査成果の紹介－」『貿易陶磁研究』No. 44、日本貿易陶磁研究会、2024 年 10 月、1～7 頁。

① 森達也「最近 20 年の浙江地域の古窯址調査・研究動向－越州窯系を中心に」『貿易陶磁研究』No. 44、日本貿易陶磁研究会、2024 年 10 月、37～43 頁。

④ 森達也 (単独)「琉球王国の朝貢貿易與龍泉青瓷」『第二届 復旦大学陶磁考古論壇暨龍泉窯學術研討會』復旦大学文物與博物館学系、2024 年 9 月 21 日 (招待)

④ 森達也 (単独)「伊朗波斯湾北岸発現的中国陶瓷」『海上丝绸之路考古研究學術研討會』会場：景德镇御窯博物院、2024 年 11 月 29 日

④ 森達也 (単独)「2023 年の中国における陶磁器関連シンポジウムと発掘調査の動向」東洋陶磁学会・総会、会場：青山学院大学、2024 年 6 月 8 日

④ 森達也 (単独)「沖縄県立芸術大学所蔵 鎌倉芳太郎資料と琉球文化・芸術の復元」『萬國津梁：東亞海上の琉球 特展国際交流論壇』台湾・国立故宫博物院・南部院区、2024 年 10 月 4 日

① 徳留大輔 2025「中国陶磁の受容に関する比較研究－トプカプ宮殿博物館所蔵品と日本で出土・伝世する作品を中心に」『出光美術館研究紀要』第 30 号 (2025 年 3 月発行)

① 徳留大輔 2024「最近 20 年の浙江地区の古窯址調査・研究動向 龍泉窯を中心に」『貿易陶磁研究』No. 44、pp. 44-66 (2024 年 10 月発行)

① 殷慈環「奈良大和路の仏像に見られる瓔珞の様式－飛鳥・奈良時代を中心に－」『なじまあ』15, 2025, pp.13-15.

④ 殷慈環「瓔珞から見た陶磁器研究－明代中後期の資料紹介を中心に－」東洋陶磁学会第 50 回大会ポスター発表「陶磁器研究のここが面白い！」, 2025. 8. 24.

④ 殷慈環「初期漢訳仏典における「瓔珞」について」2024 年度立教大学史学会大会, 2025. 6. 15.